



三輪洋平さん

私は大学で化学を専攻しましたが、化学が大好きだったというわけではありません。比較的喜悦で成績が良かったというのが理由でした。入学後も大学の授業を面白いと感じていたわけでもなく、一生懸命に勉強することに意味を見だせていませんでした。しかし、大学4年生で研究室に所属したことをきっかけに状況が一変しました。

化学系の研究室では、新しい分子の合成や素材の開発を行ったり、未知の問題や未解決な課題に取り組みたりしています。何が面白いのか専門家以外には分かりにくい内容に取り組み

## 地道に続ければ道広がる



CO<sub>2</sub>  
加熱



二酸化炭素を吹きかけると硬くなる素材。自分で考えついたアイデアはどんな研究よりも面白い

いる研究室もたくさんあります。私の所属した研究室もそのひとつで「高分子」というヒモの様に細長い分子の動きを調べていました。

私が先生から与えられた題材は「ある高分子の動きを調べよう」というものでした。当時の私には「研究して何の役に立つのか」「何が面白いのか」いまいち分かりませんでした。とにかく研究を始めました。真面

目な性格と実験が好きだったところが幸いなのでしょう。毎日研究室に通い、朝から晩まで実験を続けました。結局、投げ出さずに1年間研究に取り組みました。

結果的にそれが良かったのでしよう。勉強して知識が付いてくるとさまざまなことに気付けます。徐々に疑問と、アイデアが浮かんできました。思い返しても稚拙なもので、私以外の人には何が面白いのかわからないと思います。ただ、自分で考えついたアイデアは、他のどんな研究よりも最高に面白いものです。この自分で感じた疑問を自ら明らかにしていく体験を通じて、初めて勉強が楽しいと感じました。

その後、民間企業への就職と海外留学をした後に「もう一度、大学で研究をしたい」と思って、現職に至っています。現在も自分の好奇心に従って研究をしています。今、私は「生物のようにけがが治るゴム」と「二酸化炭素を吸収してプラスチックに変わるゴム」という題材の研究をしています。これらは岐阜大学に来てから始めた研究テーマです。研究には面倒な一面もありますが、もっと学びたいという気持ちを原動力に取

り組んでいます。最初から勉強する意味を見つけていることは難しいかもしれませんが、早くから目標や夢を持って、行動できる人は幸運ですが、多くの人はそうではありません。学生時代の私は与えられた題材に対して地道に研究を重ねた結果、大学入学時は思いも寄らなかつた仕事に就いています。

勉強することはチャンスを広げることだと思っています。学問を楽しんでいる領域に至るには、多くのことを学び、知識を吸収して上達する必要がありまます。上達すれば、さらに楽しむことができ、知識や技術をもとに自由な発想が浮かんできます。勉強は自分の人生を豊かに自由なものにしてくれるのだと思います。(構成・板倉陽佑)

みわ・ようへい 工学部 化学・生命工学科教授、専門は高分子化学。名古屋工業大学大学院修了。博士(工学)。1976年生まれ。



勉強する意味とは